へ13
3153
6止

へ13 特
3153
6

再興高麗梅巻之六

お多福警小東國ハ張三話

柴杖亭竜帥著

うくて出家はなくぐとまりのよ平〳〵欲ハ天地家ふなたまるこハ
人易」家ヲかる姿ふくハ中〳〵人ハ見ぬらるこなりと遂ゆ事
思ひもよらぬ非人の姿とるうるべ屋竟の事るらんと是代の業
一文字まこと三寸の根元ハ忠ふ郎ふるの〻竹杖ふ仕ロうしと永
て為ー宇武家ヲ和ハ拠と采入るふ銭ヲ納ヲ度網ろれバ古八体者
助と呼者中ろ沿ハ扇屋乃経義ー為ー〻ハ中〳〵東洲ハ
数とも弱ハさまこ又〳〵憂目とろんと注目ようう工夫とる」家張
ちゑ度とろのとつゞ見紙為縄ちびとあ竹杖と引提ようて

よもや然る人を討るまじと心ならず思へど八ぬ計にて御座
い私も外ならぬ歎ゆゑ供中殺ゆへども老人の淡路専助とゆふもに
きいさへつ〳〵勢菩にて出会れ候せあて岡村傳内家来皇に歎室
死骸に依とも一旦刀根さし殺ゆと真実らんてかまいうさ夜年
来んでとのゝ上ハ供〳〵歎ゆ疑ひ〳〵扨に助彦ゆゑんハいつにも目するに
専助たる悦び私弟年より親ゞとも捧の一手も致るハせ〳〵は
邪魔と恨ん為ハ何とぞて御とも中空しと勇進んて居るに
然らハ奴家と同じ強に嫉あ然ハ人も知れめんとゆふよぞれハ以と
心安事にかと忠五郎が世に候ゑ抱ゆ着し善八が報ゑハ
傳内殿同然うけ来れまじ〳〵一家門引掃まで一人的に残り
何角いつ〳〵い身役人中皆様に思ハま〳〵傳内殿帯刀の懐ふつ

し臓を紀念にせよとやさまじ〳〵一太刀恨殺
今日も入らざる事なりし腰にさゝて参りしなり只今まで一存
刀根を見すましむる助ハ淡せば大に悦び只ハ屋意見の場ゆゑ取ざ
ハ追付本望達し目出度御目にかゝるべしと立出まさバお縁
ハ白き懐紙に金やらき〳〵引裂まハせる助ハ破し手拭を頬
冠りに今一眼見して立出る小扇屋の追手追〳〵来る〳〵
非人とも傾城の女房その行方ハ知らざりしやと尋ぬる折
折ふしてさぎ〳〵ハ先ン刻大和路ハ何ぞより這入ると斬し女極て
その夫と云る人と歎ば扨ハ元来奈良の女郎ふらく間夫なれ
仕舞しと聞すさバ是へ行ハ小妻ひハなるまじ急しとお
縁ハ側に無ければ逢ぬと申して支度されバお縁ハ家内の袁

し我太平を悦び是全く神佛の御加護なりと伏拝みつゝ東海
道さしていそぎ行く

須田政範出世苛政の話

爰に説く関八州の大守小栗武蔵守氏政の家老後閑真国寺の城主兵
部三郎兵衛清次ハ近年病身にして政事心に任せず近比召抱
須田官左衛門といふ者の奸智にして物毎倹約を第一とし
天性の不情なる事一両年の内に立去しかバ城主大に悦び
又ある時老臣と謀り代官より立身して政務を行ふ事を
バ大守の仰せかうりし民を志いたげ年々年貢を取上られハ百
姓ども大に怨しく既に徒党を集め動乱にも及ぶべきを
ときの亀山の城主小栗美濃守氏範関付の者より城へ告しかバ

氏政大に驚き不仁を憤り此者より国用役をきへし百姓どもは我先につめ
奇政をなし誰とてこれをさんと私欲を痛めるもひしかバ近侍を抱
刀禰源清七今ハ蓮池の水と名付しそ先忠臣を二の老とれバ
彼と国用役をきへしなハ温泉の水らひをなし静謐に行下と蓮池
の水と云れしハ真国寺の百姓騒動を静むべしといはざれバ主
水ハ思ひもよらぬ大役ぞと辞り次退とうちをとぞも不謙譲を
せるも是非なく請やし真国寺へ参り百姓どもを呼出し年
貢を前年のごとくなし天地も後悔し政の仁政を施す須田
官左衛門が職を免じ上下目附に云付蓮池の水を招き真国寺に留
置しも仕置を新にする須田官左衛門ハとく奸智なるを見て立身せし
小蓮池の水相列より暮し仕置をなしもまた引下らるれ

おまん與津川にて
勇力の図

おさく涙くくして柴に伏しぞつるく之水を相列(ぬ)へ一番に出せん
力のくんを四くくよりごとくの水を感抜せしさを非と陸ごくくを白うけ
くくで思くくれ此須田官左衛門別人よりくば江田新義右衛門家
と之退上方へ之越るとそ弓削村を浪人よりを名指
南として行くくるお縁新左衛門之入欲を結んと切うけ為を頂し
之裏乃山うう逃出しを山伏ひよ幸系(せそを)を関東とんざを
之内よ奥国寺の城を天正氏を抱ると右衛門の来店
うて国出しお縁新左衛門執ん涙く付給くへ駕く城中ふりてを
隠ちを去うど候令を駕おくくも忍ぶおい屋竟れ事うと来店
の章を之を伝人を成下さいるを人を人を九人うぐれ
大章の章を之を人を成を駕ふ任を之るふ蚊者絶論の新義を

八出世して新奉行を之を月くくるハ不義みて家るハ涙を雲れ
くくを孔子も宜ひくく老うを　之を月くうう
お縁奥津川おくく勇力の事
かくてお縁専助ハ非人を面をとくくうんうんして房中を来うう
を助ハ同村伝内ら墓石を江戸来ふ未国不見の主人の江を之江ふ吊ひ
くれハお縁も其んさを感しを江戸来ふ之を助を
と踏換くくれハお縁も後方を来店を休くへ来を付ふを
助いを中うおんせ江ふもふんを後くくハ為うを〜新を休め
くを江戸退月下さんとくを之を出うを先江ふ十江戸を来ねを作村
と力を清見寺をとを奥津川を之を小日ハ西を傾を之を細を之
んをを〜奥津川のくを九を之を来を之を歩ハ渡を

せんとさるくこそ乃不ました男両人ハ其ゆ笠れうちと結く見て扨こ此元食ハ鳥よりまこさまこども中く此きの仮寝ようハ結笠量ゆ湯村連行ゆ育ハ慰まんと嘱ゆ会迫くしさ」ゆこれ伊勢ゆ多うゆの此川ハ中ゆ女乃渉る事ハ叶ハ難渡して進きぐしと紙らしくいくまゆれハ那ゆ掌新ゆもゆ両人肩車ゆて渉り向ゆこうて定る川越負もいるまゆれハゆ育ハ家ゆ役不ゆ泊ゆ第ゆせ仮ゆ主んじゃさん其代ゆにいゆ育斗ハ家ゆ人ゆ陸ひゆ乗ゆまゆ紙ゆうてゆるゆれゆ乗ゆハお縁ゆ乃ゆ思ひゆ流石勤ゆせゆ徒ゆ乗ゆこゆ多ひゆこゆ賊も事ゆふゆる」ゆ元見乃奴家ゆつゆんゆ」ゆ色」ゆくいひて迷ゆんゆるゆと拵ゆを引ゆらゆを元見兼ゆう是ゆ乗ゆ育ハ川越少家の仲間ゆもの食拵ゆ

せんと両人双方ゆこうゆ付ハお縁ハ欲ゆ対ゆハ力業ハ出ゆをはじゆた拵ゆ」といゆも理不ゆの車ゆゆ」ハ絵方ゆくゆるゆもゆ人ゆと両人ゆ左ゆた人」投ゆ身ゆハ川越大ハ驚ゆ此女帝ゆゆ匂ひゆとゆゆや此上ハ引ゆくはゆくゆ乗ゆ」ゆ人ゆ合点ゆうゆと両人ゆ力ゆ乗ゆ踏ゆらゆ」ゆかゆ」ハ今ハお縁ゆ絵ゆくゆうゆくゆ助ゆ乗ゆよゆ思ゆゆもゆよ美ゆ督ゆの人ゆ絵ゆて川端小水ゆ音ゆるゆで若ゆゆのゆもゆる」両人ハ人ゆるゆさゆを幸ゆと双方ゆ小ゆゆる元ゆを引ゆ」ゆて水ゆの流ゆくゆ流ゆゆ人ゆの川越大ゆ怒ゆゆ」ゆれハ浮ゆ沉ん今ハゆゆゆ成ゆ竹ゆ仕ゆの」ゆ編先ゆゆ」ゆゆゆ」ゆ引援援」ゆ拂」ゆはゆこゆ」ゆるゆも思ハゆゆ」ゆこゆゆだハ二ゆゆ成ゆて伴ゆゆるゆ縁ゆは神ゆく力乃ゆゆ」味ハゆゆゆゆ大ゆ拵ハ此力ゆゆ敬ゆ小ゆ金ゆハ

やうろ仕換ぢんと無理押越し新し絶死嚴三川（おもと人や舞んと
ぞうよう薩摩峠へ乗りう蒲原（こて急ぎる
お縁奥国寺九城下る絡
れかお縁ハ薩摩峠ふく事助と待ち（も来ぐれば義
しれる下よ流うち変儀同しき身れよ親し義さ法なば
教と明しいけるハ事を事助ハまるぐこと待ぐもく毫もせぐ
きハ給方るく見よ仕せて承宥（来うこな松と打る人沢村
よ着くるぐ方ふ小ぐくく鬼る城ぐ女（三てを又を九樽入日に鎌
きまぐく方るぐさ奥国寺の城下ぐ
て城下を伺ふ門ぐく事国岩しく守ぐう城下に少く屋
変町家ぐていと張しき風情お縁ハ思ふ外ふ歳日も

さ見よういけうなハ義と見出さ人東やるぐきと来るハ今沢松縁
連おきの色ぐと見ぐく義のて弱教ぐハ城下よ寄う新下に
姫ぐるぐる幸万義教るに拘る（書よ又奥国寺ハ城下に
清水屋接義清ぐく両替屋ぐう家内大勢ぐくぐも二義
家ぐう新しを秋のを色つぐ夕暮ぐう大義せしば肩ふ庶
さ家内ぐく打姫ぐ小教ぐ教まるて（思）ぐ門銀の小門
を打崩し大勢乱入ぐれハ庶よ姫ぐる男ども二ハ何事と狼
唄さぐと車ぐもせば金戸棚ふ立ぐる人教九十に人斗刀
抜つま先事決れ眉間ぐ鼻の色ぐつぐと切併ぐに撃
逃出る男ども家ふ切付ぐて押付ぐる内国新も有合食
狼狽ぐ新採一四ふ約方ぐ逃失ぐう義風強く拘る迫

不和ハ関さなくそ不運なり跡にて騒動大かたならず亭主其外
立騒ぎ改見るに書院と婚姻の者三人手負又人に及びし此事
早速町役人と嶋中なりし当国不和の奉行所田監物に注進せし
よつて早速亭主を召出し委細聞届何ぞ心あたりいるまじきやと
し時亭主謹しく者ハ外に心当りとても御さなく唯が去年か上方
より登りし女非人ハ私店下に毎夜伏けり不便に存食物など
遣はしけるが今宵に限り何方へ参りしや店下に伏らずも疑の一つ
此者ばかりと申しければ背田監物聞もたえ夜の事も聞くりる事なり
出し捕へ候し昨日捨使を走らし旁く詮義せよと仰せを
遣はすに亭主ハ先へ帰りける扨も御縁ハかくる事ありかべしと只管に
もまた夜前ハ風変つて参詣道お寺の門下に伏却も明ぬまゝハ

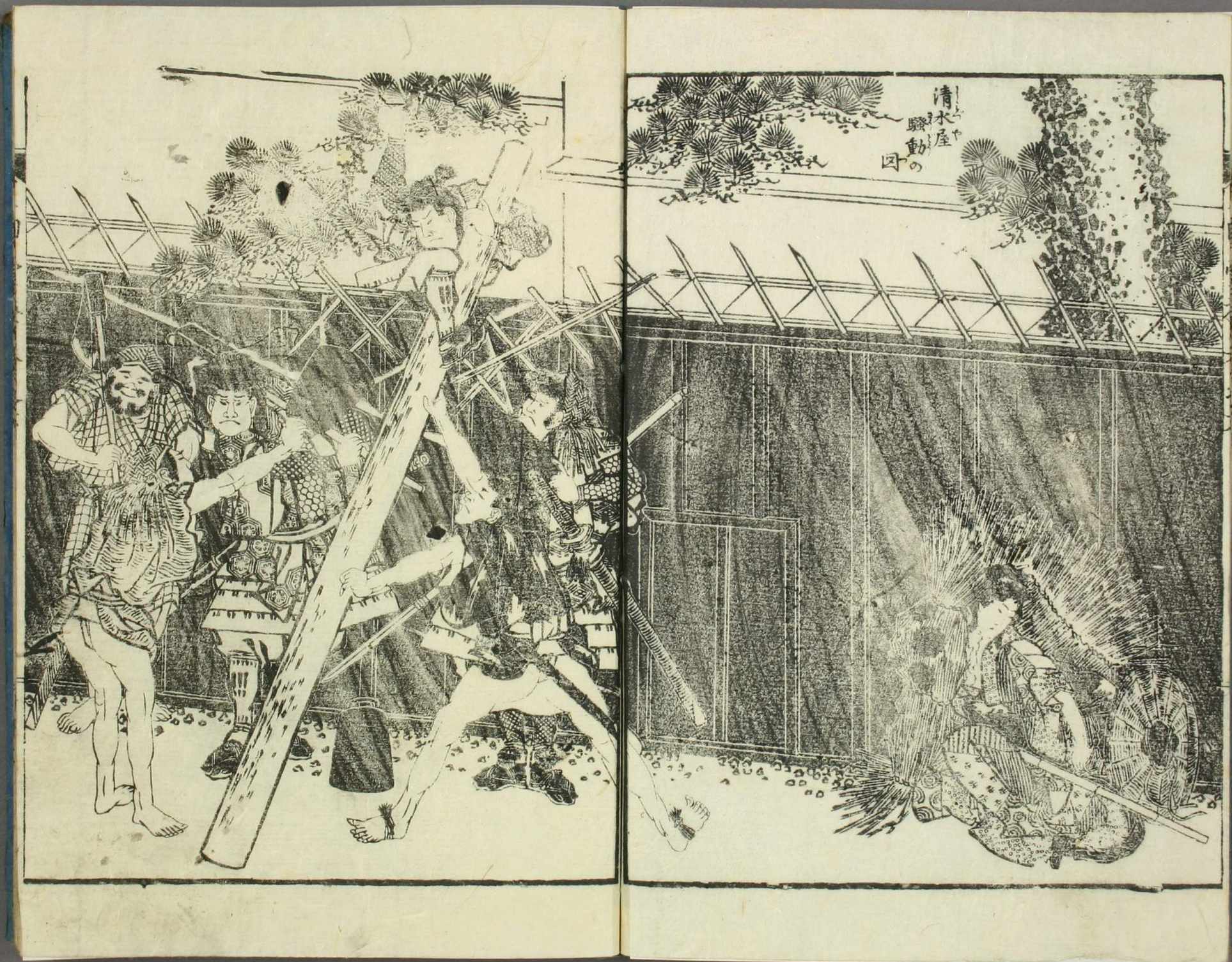
城下へ志し来る途中にて待受し男ども手に手に刃物を引提
商人の隠家へ押込家内残らず縛り居たるに御縁師来りて此盗賊
かゝりて家縛るしめのみやと申せしところ亭主を様子を聞き
勘五郎といふハ荒者進み出て盗賊押込手負死人なく取ておさへ
定めし彼ら手引する者ありしやと新たに伏せる小門の店への路の
道なる事を知その内にて疑をし不便を加へ養ひし恩を仇に
なすも不屈者今に彼奴を見せしめにして大小前もしれず腹の
事を宮の物に添へそうく浅ましく零落し情けども心ハ
など様子なるきかみて此恩を忘れし此家なるに盗賊の手引
せし事ハ甚しく忘れざる事なりと涙を流し説法きかしむ
聞入るものとし勘五郎ハ手代の様を引提来り扨く盗人なりけり

しく有給ふ白状せぎんば此梅をきり折殺さんと怒でうると申る
ハうけ密蔵入郎をいつて其梅をきり折殺ぎせば後家の怒と矣
扨く廉忽るいく方と押へ爰る角捜使ゝして戸畦家よ
ゝ粉く同淵紋と称る筆地るを水下同淵須田宦左衛門金丸ば
結く怒るゝ出迎へゝる

お縁歌ふ出会歌紂の絵

うゝ歌ごゝろ〳〵吾八が粋を助ふ蛇ふて笑ゝと痛るゝたゝろ
笑大ふ腹中ゝ一笑ふ引絵ばゝゝうるすゝげふ仕て悪を図し
ふ弁い色げども岩ふ仕ふ仕せるゝ扨ふて十日弟
して渝奥国寺へ来るお縁と二方く尋るふ毎歌清水谷と
つゝ歌稽古の新ゝに仕ふ家ゝて不便と知る女雛人の事丸ん

ゝ知ゝ教ゆるふ人張ゝく清水谷へ来るこの年ゝくの女雛人を
さるゝこふ居ゝゝやと尋ゝまゝ下男ゝも性ゝ国と見合ゝるゝや
同歌ゝゝ来ゝゝれと育ゝを〻ゝ〻ハさゝ引志ゝゝゝれば中駄仕
天ゝてこゝ仕事紙ゝゝゝゝやゝいで世もゝて汝天の綱ゝゝく
つゝゝも志ゝゝゝゝゝと来ゝゝて最ゝゝ下同歌の女雛人を
ゝ摘ゝゝゝゝゝゝ来ゝゝゝゝ引ゝ吟家へ連行ゝゝゝ
笑れ人延ゝく志ゝゝゝ裏乃ゝ家ゝ来ゝゝゝ書
を射て引居ゝゝゝゝゝれゝゝ助ゝゝ結ゝてこれゝゝゝ
仕ゝゝゝゝゝゝ出ゝ家ゝ拉ゝゝゝゝ
ゝ負ふゝゝ清ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝ仕ゝ


清水屋騒動の図

ぎしく深きぐらつくよおえんハカと得人くよ匂ひこゝをこいぬ家が
同左の人ありつくいまもめあらびしも逃も走もいさぎれ先ぐ
いまし水紙ときのくとつくよ章を主も むりとも助ごいましめ紙
しきを戸細とえんしをる時よ捜使入来まぐ先く両人よ者しく
書紙付出命のよ墓地ら水源田友左衛門方死骸を貢と
改家内隣家のぼ書とをう紛失れ今根負殺も改其捕亜
し女非人ハ出べしとつくよ章主ふく一人ハやしき去を捕亜
ひべ両人ともハ捨家下さるべしとを庭へ引出しくる去程よお縁
る助い義れん花みて捜使の糸へ引出され章をハやきすの
しもハ見ふとつくよ源田友左衛門方声をとうけんぐをさ両人の非
人ふを海東糸の盗紙の同新ちぐ縄うけ引よしつくよの多

みてをくをえんぐをうハをとをていをしおえん思ひぐ新をふく上て
見てををきぐ思ひけるやは田新花ふまぐく方もなをう名ハをそ
を家見てんをと逃し行材引そぐめ亜る人の油ハを見海し掾
へをうをと花上るをうをく行材引掾新花ふ花うをと肩先二三す
切付をう郷花大ふ鬱ををふをを非人同何加のをひと多掾す
るふおえんをををげまし見志しを新花海を伊材ふて材をらし
うく淺同しく蔵ふをしもおを逐んをあるぞや番は新花馬
娘のおえん親乃歎親をせよとををふくるをんをうと拡合せ
ハを助も拗花稜打海よ殺をを中園村伊四ぐ家
来を八ぐ悴を助を歎花けくんと笠のをくも打家を切てく
きぐ家内たよ強をを振籠去のぐををぐと墓地を水

押静て名をとけやよか山家と見て急きしら刀脇差はせるの八計ら
ずもさいぜんよりつて後見をするぞ家内のものども何と立さるく歌
対するぞ某家よりう弱者に搦負うるべしといふよおえん八真
び強るさこいうる事まてしかるよいとやとんあるむと弱者なさ
ると切てうる者助をさびる中よ押割切てうるべい弱者大う
怒り新中間の悴喜かるうに一対みして異人と獅子乃荒ゑる
べく両人とおまよ武しがちえん八年来の鬱憤一時小ゑぜる
るものべ踏四く切付る弱者八猛しといども初太刀肩先
の疵よ到るも西代又一刀切付べき助後へまう腰のくうど切
四べさし力の弱者ぞふど倒るとおえんいきうつてんのうえと
打おくのうつてくめとさしくるべ助も一刀どさし直踊

よりく怪ぶ限るしおえん八清七とくくと見て扱く不思議
る八ものどるうりうりてたも良と立退兵人今此所分のくきしおよお
いしてくき所姿那花と向じく居うるるとぐ不審うう
ちうよを水完尓と打ひ是ゆい程ぐれ扱清ぬるべも一拍一
ゆよをたべさふ行くに先く歌打の縁と城へへやえんお縁を姫と
大世川よ行もべしと幸を中渡し盗賊のうハ扱よ成るべ仇討
の事と天野家へ涙をしうる
盗賊ども石捕るく法
且既先年寛和四おくお縁よ紅梅指南せし関に内義ことハ
義道稽古ゑ渡府今川家分熊谷ちう和紙五百五ふ紙を抱家
中級術の指南ちうるさき相列小象氏政今川武元隣国のよ

しこ百姓毎夜番を伝ひて代夜ハ関に内義を使ふとして相列へ
約束帰使ふを勤こ俗宿泊りて上下六人止宿して其夜代
藤竜屋へ盗賊六七人入て関にが荷物を選び出る而代番を強こ
と云る而代物を出せと段々切付こハ番人ハいつと云て倒れ燃す
代物を関にが家ども関と見しこハ盗賊ハ狼唄さぐと六七人
の盗賊段々にて切てゝる勇物乃下ハ弱兵なし美堂中間ども拍
ふと渡り合ひく戦ひ乱ひるに関にハさぐ気もなく気和ふうん
静ハ多勢く敵ハ甚而ハ待も和ども人の大男刀引提番
而の方へ来る而を引ゝづいて投付ハ
代夜ハ次の間ハ来ると切ぶ盗賊ども打付ハ
投付て出ると不ゝ矢場ハ七人の盗賊を一時殺しにあ番

と疵ゝる不幸疵ゝ荷物を元の而へ出さ
しめ而の代宿へ歩させる此不ハ小糸天使ち氏紀のち紀ゝ
番を検使来と関にゝ番を称し此盗賊ハ真国寺天世家の
城下へ入ゝ人ゝ人ゝ城番ん残らと法とせる盗賊ども
義の見ゝ花して見ゝ其番ハいまゝ
後悔する事限り早番も真国にゝ検使盗賊
天世家へ引渡ゝ身長下河乗出若学ゝ河
下ゝ三ゝ法手柄の役ゝ天世家へ使ゝ
ゝ事ハ去ゝ合なゝ幸坂岡乃
屋敷出国律ゝ引つゝ真国寺小栄氏紀
の家臣戸川教馬右衛門ゝ法説ゝに藩国ハ名ゝ

国に義こうをうまこばさうぬぐ餐毒扱一服日出西に孫こうき紙
討れけると咄さふ国に夫い行国の去ふうや仮人美へくた坂出
新左衛門様芸の娘のう小ぶと咄さふ国に大ふ驚さ行こそ
其婦人ま面倉いう爰よしとつまま旅宿へ中きハせべお縁
ハ行事やらんと天北家の裏方ようまつうし衣装と云鋪
来てこうきこば泉州まて術指南ま新うし国に内義こうをな
きべ大ま驚ゆさこいうまと手紙折ハ国に完乗とお名へ一服
日年来の本を遠らきしは孫を有其も時と湯て今川
家ま勤仕しる縁とおうさ家お列使えま結さ歌来
旅宿へ盗賊入と悉くに捕しま氏能の家士天北家へ引渡
美よとうれこふ方援い正へ出う面倉とる事所先の縁はき

ざる正ろうと悦べお縁も五年の憂事を見ふまで城下ろうと
藤もおく浦う悦ぶ事限おし扱お縁筆池ろ水を呼もし
ハ家云号の吏出国及の筆池在とう脾清勉ふくはと水新
ろて紗来和ざう上ふ外ら浸も家良ふく列法ち儀ようう見合
の庁く知れ如家も孔身と離さあち儀ま見の庁く出ると合せ
不思議も占う合待る呂今ハお列小来家ま仕官ようう名も
筆池ろ水とはれとはぎうに使ううまべ白水も国に小一礼まぐ
不思議の面倉ろうく悦び勇ろうる来ようう国に石速し盗賊と孔引渡ま
さんと白洲ふ引出し結く兵を見るま盗賊の云伝い先年おえん了
ちてうる目ふ逢し山田隆右兵今一人ハ今川家の浪人山路友ち
又一人ハおえんと白引きる七九郎ろまこばこいうまと驚さうまば

高麗海老名
ゆるん親の敵
沼田郎蔵を討
本意と成る
図

そもそもこの天地家の従人蓑池の水関に至て盗賊の給仕をなす
腰巾着の所匿を見て深と流し其岸和田と云退悪業次第に拵出
呉人今小くに呉服山の山中に盗賊のそなたなるを知て行しが一昨夜尚
不清水屋へ押入まと負せ又数条先生の四海にも数ヶ所に旅
宿へ押込くいまゝにもなら是しも天命遁るべからざる所なり
とさゝうつふけば今一人の盗賊其は今川家小勢し山猫藤右衛門と
申せしが岡村伝内が妻小慈悲し江田数馬小不義悪
名と絶えて伝内に妻と数さし伝内も数馬と対面なる時
家人ようせ率るまゝ人志沢勢し天乃いそなるしかん一
去年以来二丁町の遊女よん奈ひを敵の仇開金を盗り事
所を捕ふまうしと申うしと切腹を命じ為の下と

るつてけうしがくいまゝにならるゝ天罰なるとおそれ
七九郎を見るに徇ふぞうけもつこの如
九郎おそれとして又蓑池の水関大恩の主人と白引荷物編笠
大恩の主人と白引荷物編笠も奈ひも奴家と白引る数右衛門七
玄蕃と云仕せと怨うるまゝ七九郎面目なげふ所と上悪乃報い条い
きぬ物おそれおえん白と白引る金をもたちまち博奕ふおまけ
まうと不く深沼して又く伊勢紙編笠と賣拂喰金ふ
江戸へ却んと来るしが終るの所在乃つるまを成て一両年も
盗賊せしと仕ふ及ぶ天罰ここと云清病者よりて行
関口蓑池乃両士盗賊一件と計らい白れとなるよ所在乃悪い死罪に
拵り山路安右ふいも助乃人岡村伝内と右衛ふ殺害せしぬる悪い

私そ紂ゆるしなくれいおえんも七九郎舎り情るきいさーうと私へ
ゆさうれしあうよ彩ひる何茂国ごけ脇を考ハ宝泥な考ハ専
助ゆくと対蔵しるおえんハきとをきとけ己七九郎年代の恨汝ゆ
んよまでーいひーきとつよまくたの脇と打落ーあーむとえん
てまくこたの統と打落ーくゆ悪の報
でんれよき国に内義くをい盗賊一件行何くきバ天地家へ
暗と若ゆ国うるよ天地家種くを遠り拘礼紂ゆうおえんを水を
まくこて所月ふううくまく別まくる来ゆう清水屋家内とた
呼盗賊ろ仕業ふお遠おくれい事を推参清いおえんと打撃せ
んとせーい事と後悔をくよおえんハ斬下ふうて情と蒙ひし事
と百まく礼紂ーくる墓池を水へ家内ろ上とお城へ返ろ氏改

ろくゆくんおえんを助ハ生くくくそ尾紂敬紂ーー事とゆきハとべーと
云ゑてお別へゆうくれハ各事紂伊勢へ書状とおーー様く無国
寺の城内ふううとくくれ
僕僕の面くゆ世の絵
おえんゆ敬ゆ様ゆ様嫁の尾ろ方へ墓ーくくハ一両年書状
紂ゆ死れ狂も土葬ざれゆも書状をくくを不さえ様ハ様ハもろ
日と命日と吊ひーくくふくくと見て藤生の絵ーゆくを考れ
墓池を水よりも書状をくくーくくハ紂ゆ事限おーくれゆも
敬ゆ墓ろ病死と悲ーくを忠臣と表くくゆ伊勢みても若八情ゆう
の書状ゆて本懐と達ーくゆる事と大くゆ紂びくる旦統墓池を水
お別へくゆろ氏改ろゆ要細とゆくくハ大くゆ感んーゆくハ一ゆ

汝女房を使はし大坂へ行紙香炉入家と立ち帰るべしと宮内大輔
家へも内々様仕きいされうる事ようう氏おえんや助八天井家か
数多の騒動国と分て変出来先後府の城へ寄り関に内義ことを
よつ面倉して礼謝をしれば内義元おえんおれ
逢るをれんとの事なり明日必ず城へ登べしと食後し
る翌日義元の出来おえんと右もされ歌紂の事と称美きひ
臣おえんと迎くるまで其方の家宝大流布盗取も志深将
軍家へ立上事申侍とるに甲斐国へ参上事油断なりて今川
家へ一大事なれば此後口外おきゆふ新入なり父彦右衛門
料して駿河金一万両差上とうとけりそれば おえんい歌有て義
しる恩と謝しる出又当物家下良ふ仏会ぬんさ珠ふ岡村

伝内不便ろ死を遂るれい右の仕三百石を差しし白後岡村与助
名家せよと関に成仕もきそれば与助い義見しし花瀬歌
るして拾らぬ私いそ大様を仕戴いるとべきと辞退しそれば関
に河と紀しとうべ汝主人の名跡を立るを悦ぶんおしやと紀の
尚無ふ出結ヤ上ふ亜仕場へ行きさ若八ふ物語るふ踊ようて
恢ぶ事限るし家内引つき後府へ寄り岡村伝内が元屋しきを
拾紙し繋昌し若しふ主水おえんい関に入服とそれ系松三
就陸尾尼ろ達るれい雨曇義の事ふ逢しん地大坂旦那寺
正光院也伴家の番頭の家名を立る事をお法もるに陸尾ふ是
虎ろ物尚年十六戈分と名跡とおし今川家ふ紀の一万両ろ
の金と以再び慶宅を家仰しを後しそれば正光院ハ彩り重

金銀財宝をおえんふぜ〜うしばおえんい長〜陸産をうけ〜ふ上
八系統引拂ひうるほよ住宅〜ゆ〜と陸〜大坂〜引〜う縁藤の尼
公は主水お列に左様下女数多付乗まう其辺〜主就刀脇指
則国と彫るようちゅう言〜ふ脇後同〜き姿ありと主水見
ふ浪〜ゆ〜ゆ不幸の罪を御〜ゆ家に引〜う隠宅を変
志ばらい楽小養ゆる主水夫婦其後ゆ供数多出来志も
長寿ふて後ふい主水おえんも隠居〜て高ば〜寿ゆ茶ゆる
〜そちゆ〜〜ん

再開高臺梅巻之六大尾

軍書小説類藏板目録 大坂心齋橋通 北久寶寺 河内屋源七郎

楠二代軍物語 平家物語 五冊 繪本雪鏡談 春暁斎作 同画 十二冊
楠正行戰功圖繪 藤陵 十冊 同金花談 春暁斎作 并画 十二冊
小楠公正行父正成卿の遺訓を守り南帝の御
為に忠を尽せり屢奇特を失敵を滅す美誉之
同孝感傳 同前 十冊
神功皇后三韓退治圖繪 五冊 同亀山話 同前 十冊
國史實録に上古の事の詳かゝ知り難きを
書顯さるものゝ事を表し繪像を画き代々
容態を寫し一ぬれば兒女子の目をも抜いそに
既に看官宜く事實を識せば作者の幸
墨と畫工為齋の意匠を賞し給へ
同顯勇録 同前 十冊
同忠孝二見浦 南里高子著作 柳齋重春画 十冊
九州諸將軍記 十二冊
同月宵鄙物語 真顔作 十冊

復讐言岩見英雄録 初編 七冊 繪本誠忠傳 遠山春曉斎作 岡田嶺画 十冊

同 二編 南海玉藻隠士編述 七冊 同合邦辻 岡前 十冊

同 三編 大澤東陽主人編述 六花亭冨重画 七冊

復讐言岩見英雄録第四輯 七冊 同芳芽草紙 浪花鐵拐子著 布田玉峯画 十冊

南海 玉藻主人 編輯 浪花 一鶯齋歌川芳梅画 近日發販

本輯は極力発奮して七人の義者傷痍を推きうる別伝岩見稚桜野村彩十郎と敵対を示す為に丹能ふ乃ち強盜を斬の一條獄牢及び遠い丹能ふ乃ち強盜を斬の一條穴蔵五輯の列ついい丹州の長崎後但馬の乃ち敵えて毒悪の婦を除き文覚の大奇を挙げ乃ち快話を

同浅草霊験記 春曉斎作 同画 十冊

同忠孝美善録 東籬亭鶯人編 春曉斎歌作画 十冊

同彦山霊験記 遠水春曉斎作 俳画 十冊

祐天上人一代記圖會 六冊

祐天上人死霊解脱物語 二冊

同二鶯英勇記 岡前 十冊

同金毘羅神霊記 同前 十冊

新累解脱物語 曲亭馬琴著 葛飾北齋画 五冊 小栗外傳 小枝繁著 北齋画 十冊

昔語質屋庫 曲亭馬琴著 勝川春亭画 五冊 繪本忠臣藏 平安亭孟遠著 作同画 十冊

同 中編 五冊 同 後編 十冊

同 後編 五冊 同 拾遺 十冊

新撰の古器物の特質屋の庫を各巻のとを語り旬に話して古来の説の誤りを明らかにす 曲亭翁の妙作なり中編後編の種数柳川子の傳奇の説

増遺の一編は義士の復仇の説話にして其の美なる始終貞操義烈の美談を編成せり

朝比奈巡嶋記 自初編至六編全五冊 馬琴翁著 豊廣画 七冊 書画李西遊全傳 南都大雲亭著 十冊

七編 松亭金水編述 葛飾為斎画 五冊 二編 十冊

八編 同前 五冊 同 三編 亭翁編述 北齋老人画 十冊

同 四編 同前 十冊

曲亭翁の四著にて鎌倉の時変を新の史外の寺書にふべ比姉案ろれば校其十を其その補を備て七輯を見れば賴家卿安達を盛の妻ひ奈ことと朝奈義秀横尾使こと義り奥ふ趣を一忠信後の義時ら武に計を福り勇を奮て盛徒をろ

本編は演義三国志水滸傳金瓶梅西遊記四大奇書と源土に物語の作譯説話をれば書は面白

松梁 秋七種 曲亭主人遊作 六冊

情史 閑際久松の姓氏世譜を古へ南朝の末の[illegible]の人時[illegible]忠臣夢古の紙[illegible]陳松が古主の興に義を記せるなど[illegible]

石言遺響 同前 蹄齋北馬画 五冊

遠江の國小夜の中山なる夜泣石説種と[illegible]
[illegible]の里の奇詩さんと哀[illegible]

月冰奇縁 同前 五冊

金花夕映 薗暮里谷峨作 北嵩画 五冊

[illegible]唐金義右衛門[illegible]を記せる小説

孝子嫩物語 蘭山作 五冊

繪本夜船譚 [illegible]蹄齋画 六冊

繪本那智白糸 蘭山著 北馬画 六冊

同 魁草紙 [illegible]軒蕃二[illegible]作 五冊

同奈古曽の潮 風和亭鬼武作 蹄齋北馬画 五冊

同平泉實記 遠水春曉齋 遠作 象圖画 十二冊

同自來也説話 [illegible]和亭鬼武作 十二冊

同 口之碑 [illegible]馬画 五冊

風流俄天狗 朗蘭後編 十冊

村上社陵子の[illegible]南玉 李庵 角[illegible]
[illegible]平 淀川 目録 三霞 田[illegible] 又流[illegible]
[illegible]

小夢 一代記 八一鳥影 谷田菊亮作 [illegible]画 一冊

紙治 小春 椿生淡 東魚作 春[illegible]画 五冊

復讐言初瀬物語 [illegible]亭 [illegible]著 七冊

復讐東東物語 [illegible]作 [illegible]春画 六冊

同 安達ヶ原 [illegible]画 六冊

再開高臺梅 [illegible]作 六冊

繪本白壁草紙 東[illegible]作 岳[illegible]画 六冊

晃外白宰[illegible] 五冊

通俗亜山夢 十返舎一九作 五冊

貧福太平記 春の[illegible]作 [illegible]画 三冊

閑際筆記 懐齋勝井先生著 三冊

新田足利を外名將の評論聖武帝の傳を[illegible]論美法國
各級の油の石脳油[illegible]漢人我國のことを部[illegible]
[illegible]譚 [illegible]聖德太子を聖人と
過譽の私論を[illegible] 龍鏡 [illegible]帰納の[illegible]
て[illegible]を[illegible]俗説を[illegible]論 庚由の説[illegible]吉
[illegible]人臣[illegible]を忘れ[illegible]録 和漢古今の
[illegible]薄扇を[illegible]妖怪を[illegible]切要の書[illegible]

教訓鄙都言種　前編 後編　全四冊

桑羅子の著作　[illegible]の面白き　後編は玉山子の面白き　黒田如水の逸話　[illegible]

百家琦行傳　岳亭五岳著　五冊

士農工商と僧俗を論ぜず近代の奇人の行跡を感奮せしめ怪を世に[illegible]

雨月物語　上田秋成著　五冊

[illegible]

桂林漫録　桂川中良先生著　二冊

好古博識和漢の群書を渉猟し[illegible]

美作孝民傳　十冊

合戰評判

古戰評判

續古戰得失論

三條小鍛冶名劔由来

昭代著聞集

太平記　片假名大字　廿一冊

續太平記

鷹觜先生著
名和對月書
新選普通作文必用　中本　全二冊

右書ハ頭書作文類語數多ク揚ゲ本文ハ日用文ニ皆々短文ニ綴リ小學兒童ノ作文一助書ナリ且ハ商家ニハ必ラズ便用ニ可相成珍書本也江湖諸君購求アランヿ知リ玉可シ何方ノ本屋ニモ有外御求被下候

書肆　大阪北久寶寺町四丁目十八番地
文榮閣　前川源七郎